

自ら問いをもち、共に学び合う授業

～子どもの追求を支える「新聞活用の在り方」～

長岡市立千手小学校

1 学校の概要

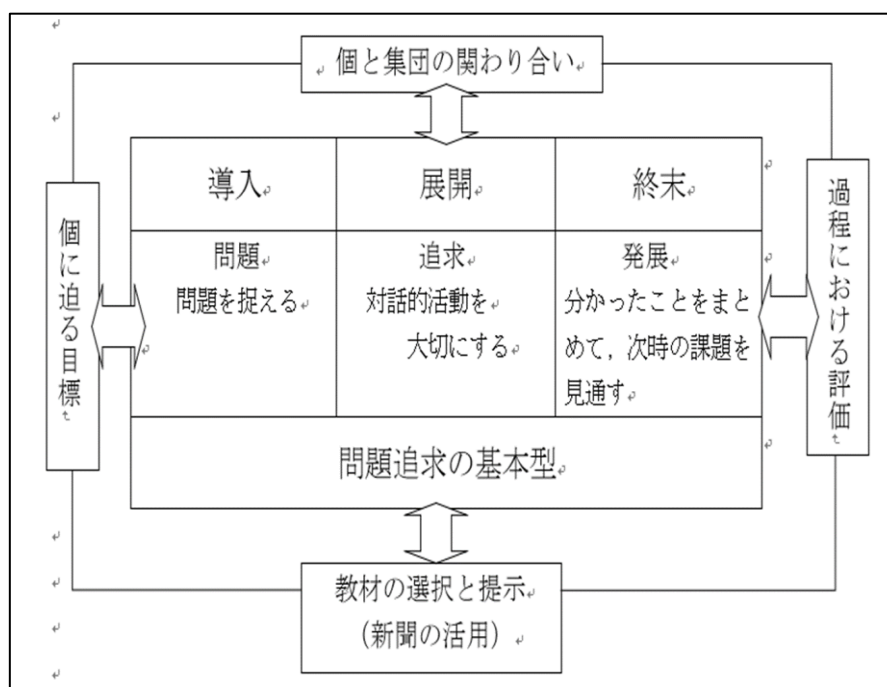
教育目標に「深く考える子 仲間とともに生きる子 すなおに感動する子 じょうぶでつよい子」を掲げ、過程や地域と連携して教育活動を推進している千手小学校は、本年度、創立 145 年目を迎える。

当校の教育活動の基盤となるのが、2000 年度から始まった図書館づくり、読書教育に重点を置いた取組である。2002 年の 130 年記念事業では、地域や後援会の支援を受け「お話の部屋」「はかせの部屋」の 2 つの図書館が整備された。保護者による読み聞かせ活動「お話タイム」や著名な絵本作家による「読書講演会」子どもたちがお話の世界に浸る大切な活動となっている。

2006 年から、土曜日には学校図書館を地域に開放し、開放ボランティアとして地域の方、保護者、学生、職員が運営を行っている。これからも、地域、保護者と連携しながら未来を切り開く子どもたちの育成を目指している。

2 NIE 実践のねらい

(1) 研究主題の意図



【図 1 自ら問いをもち、共に学び合う授業】

当校では問題追求の基本型を①【問題】問題を捉える②【追求】対話的活動を大切にする③【発展】分かったことをまとめて次時の課題を見通す，という過程と考えた。A児，B児を決めた個に迫る目標を設定し，過程の評価をしながら子どもの成長を捉えていく。子どもが学び合う過程で教材の選択と提示が行われ，個と集団のかかわり合いの中で，授業は進められていくと考えた。

(2) めざす子どもの姿と研究内容

自ら問いをもち	共に学び合う子
<友達との関わりの中で> ・学習課題について考えをもつ。 ・友達の考えと自分の考えにずれ。 ・新たな追求課題「問い」が生まれる。	<友達との関わりの中で> ・「問い」に対するしっかりとした「こだわりのある自分の考え」をもち，対話する。 ・対話の中で，新しい視点を見つけ出す。
<新聞との関わりの中で> ・自分の認識・知識とのずれ。 ・記事に対する友達との受け止め方のずれ。 ・追求課題「問い」が生まれる。	<新聞との関わりの中で> ・新聞を活用して「こだわりのある自分の考え」をつくる。 ・新聞を仲立ちにして，新しい視点を見出す。

【図 2 友達と関わり，新聞と関わり共に学び合う子どもの姿】

「自ら問いをもつ」とは，自分自身の実感・納得・本音に基づいた「分からないから，どうしても知りたい」という強い問題意識「問い」をもつ姿と捉えた。また「共に学び合う」とは，相手の考えにすぐに同調したり迎合したりすることなく，友達との協働・対話の中で新しい視点を互いの関わりを通して見付け出し，自分の考えを広げ深める姿と考えた。

加えて今年度は NIE 実践の 1 年目であり，子どもたちは新聞から得られる様々な情報を基に自分の考えや見方をつくったり，問題を見出して解決策を考えたりしながら友達と共に学ぶ姿が期待される。さらに，読書に慣れ親しんだ当校の子どもたちが，新聞という教材を目の前にした時，活字の背景にある書き手の考えや思いにも目を向け，それぞれの受け取り方の違いから新しい視点を見出す姿も期待される。課題設定場面や考えや見方をつくる場面，問題解決場面において，教材としての新聞の有効性を探ることは，共に学び合う授業づくりの具現化につながると考えた。

以上のことから，研究の内容を①認識のずれから焦点化される問い②子どもの追求を支える新聞活用の在り方とし，研究を進めている。

3 本年度実践の概要

(1) 新聞を活用した授業実践

学級担任は、年度当初に実践の重点教科を定め、それぞれが「個人研修計画」を作成した。これまでの自分自身の指導をふり返り、個人研修テーマを設定し、求める子どもの姿に迫るための手立てを考えた。手立てには新聞活用の在り方を示し、1年間の見通しをもって指導を行った。

(2) 子どもに新聞を身近にする取組

子どもたちが身近に新聞を読む環境をつくるために、次のような取り組みを進めた。

①NIE コーナーの設置

各階の廊下の一角を NIE コーナーとして子どもたちがいつでも新聞を読める場所とした。休み時間に新聞を手に取り、興味のある記事を友達と一緒に読む姿がたくさん見られた。

またコーナー近くの掲示板には、各学年の NIE タイムの取組の様子を掲示し少しでも新聞に興味がわくような環境作りに努めた。

②NIE タイム

当校では、9月から週1回朝の15分間を「NIE タイム」と称し、新聞と関わる活動を設定した。

(3) 職員に新聞を身近にする取組

①NIE 研修会の実施

6月に NIE アドバイザー新潟市立矢代田小学校教頭 古井丸裕三様をお招きして、NIE 研修会を開催した。

②職員 NIE タイムの実施

週1回の職員終会の際に、職員 NIE タイムを実施した。自分の興味・関心のある記事を選び、発表した。発表で使った記事は教務室に掲示した。

③新聞を活用しやすい環境整備

「ふむふむダイジェスト」のファイリングボックスや新聞ストック棚を設置することで、新聞を授業に活用しやすい環境を整備した。

平成29年度個人研修テーマ	
名前	
校内研究主題	自ら問いをもち、共に学び合う授業(1年次) ～子どもの意見を促す「新聞活用の在り方」～
求める子どもの姿	問いや疑問をもち、他者と協働を通じて、自らの考えを広げ深める子
個人研修テーマ	問題を明確にして課題を解決し、主体的な意見が述べられる子の育成

○課題(昨年度までの指導を振り返って)
お話を聞きながら、積極的に自分の考えを表現する子達の育成を図ることができた。相手の気持ちを考え、友達のことを慮りたり言い争いをしなくて済むようになった。その反面、様々な角度からの考えが出てきて、まとめることが難しく、自分たちが何を達成していたのかも分からなくなってしまうことがあった。その原因は、課題の整理(学習課題の整理)がはっきりしていません。子どもは自分のどの立場について考えればよいのか分からなかったことである。
○今年度の挑戦(「求める子どもの姿」に迫るための手立て)
・自分の生活経験や他者の言葉から「なぜ?」という疑問を投げ出し、子どもたちが考えられる学習課題を考案する。
・学習課題の整理を明確にして、子どもたちが課題について考えられるようにする。
・多くの子どもが考えを積極的に発表し、つなげて発言できる子達の育成につとめ発表方法の指導を行う。
・本物について多角的に考えられるように、友達の考えを聞いて相違の点に気付かせる。その際の学習課題(論点・論理・根拠)やツールを指導内容は合わせて工夫する。
【手立て①】フリードークをもとにした話し合いの場のづくり
友達が話し合いで考えたり意見を述べたりする際は、多くの子どもが参加の場で発表できるように板書板の活用である。また、課題が明確になり、子どもが考えを述べたりする際には子どもたちの主体的な学びの場を設ける。そこで、児童会でフリードークを行い、家庭の場で話し合いを繰り返す。友達の発表への反応や自分の発表の仕方を見直しを行う。
【手立て②】「誰か」を明確にした学習課題提示と板書の工夫
子どもが誰の立場で課題について考えればよいのかを明確にする。そのために、学習課題に必ず主語を明示する。また、課題によって使用する場面を分けたりできるようにしておく。そうすることで、板書板の話し合いの場を設ける。多角的に課題について考えられるようになる。
【手立て③】子どもが本物について多角的に考えられるような資料の提示
真に付いた知識・技能や思考・判断・表現する力が、これまでの学習や生活で生きていくためには、一つの事象について多角的に考えられることが必要である。多角的に事象を見ることで、より深い理解へとつながっていく。よって本物や多角的に考えられるような資料の提示を行う。自分以外の立場からの考えを述べるもの一つとして新聞が考えられる。資料として有効に活用していきたい。
○公開授業教科、学年、単元、時期
社会科、6学年、災害から私たちの安全を守る、12月1日
○指導者
所属個人先生(新潟市立大森小学校)

【図3 個人研修計画】



【職員 NIE タイム】

4 NIE タイム実践例

(1) 低学年の取組

片仮名の言葉を探そう

新聞（「週刊ふむふむ」）の中にある片仮名の言葉をたくさん見つける活動を通して、片仮名に興味をもち意欲的に片仮名の学習に取り組むことができた。「時間を区切り、片仮名をいくつ見つけられるか」「伸ばす記号のある片仮名を探そう」等、ゲーム的要素を取り入れ楽しく活動できるようにした。また見付けた片仮名を読んだり書いたりすることで、国語で取り組んだ片仮名の学習の習熟を図ることができた。

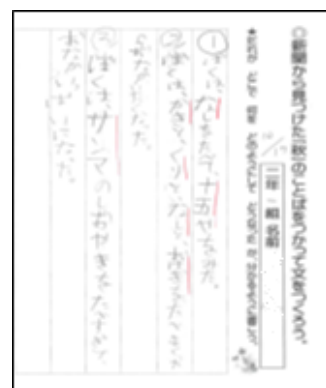


【片仮名の言葉を探そう】

秋の言葉を探そう

新聞の中にある「秋」に関する言葉をたくさん見つける活動を通して、季節に興味をもったり、いろいろな言葉を知って使ったりして、学習に取り組むことができた。

見つけた言葉を使って、主語と述語が分かるように、楽しく短文作りをすることができた。



【秋の言葉を探そう】

(2) 中学年の取組

分からない言葉を探そう

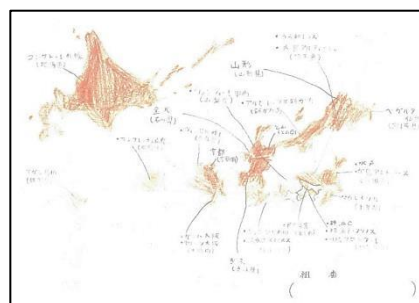
「週刊ふむふむ」の「赤ちゃんパンダ」と「皆既日食」の記事を読んで分からない語句を国語辞典で調べる活動をした。話題のニュースに関心を持ちながら、国語辞典の使い方に慣れたり、語彙を増やしたりできた。また、記事の内容を正確に読み取ることができた。



【分からない言葉を探そう】

都道府県を探そう

新潟日報の「アルビレックス新潟」の記事を読んで他の都道府県にはどんなサッカーチームがあるのかを見つける活動をした。新聞記事に載っている都道府県を探して白地図に色を塗る活動を通して、都道府県の位置を知ることができた。



【都道府県を探そう】

(3) 高学年の取組

みんなで読もう新聞記事

みんなで同じ新聞記事を読み、記事の中で気になるところをチェックしたり、感想を話したりすることを通して、日常生活の様々な出来事に興味をもつことができた。投書の記事を読むことで、投書した人の考えを知り、その考えに対して自分なりの考えをもつ活動では、友達と考えを交流することで一つの事象を多面的・多角的に捉えることができた。



【みんなで読もう新聞記事】

新聞っておもしろい

全員が同じ新聞記事を読んで、気付いたことや考えたことを書いていく。読むときには、気になるところに線を引いたり、分からないことを確認したりしながら読み進める。

社会で学習したことに関係する記事を使って活動した際には、難しい表現について、互いに教え合ったり、解説を加えたりしながら一緒に読み、知識を得て理解を深める機会となった。



【新聞っておもしろい】

5 新聞を活用した授業実践例

授業実践 1

第3学年 社会科 「未来につなぐ長岡花火」

授業者 富澤 智宏

(1) 本時のねらい

フェニックス花火が中越地震の翌年に打ち上げられていることに着目し、フェニックス花火を打ち上げるために関わった人々（土田さんたち）が、長岡花火に関わる人々に説明やお願いなどの努力をしたことに着目し、中越地震からの復興支援に感謝したり、長岡の人々を元気づけたりしたいといったフェニックス花火にかけられた人々の思いや願いに気付くことができる。

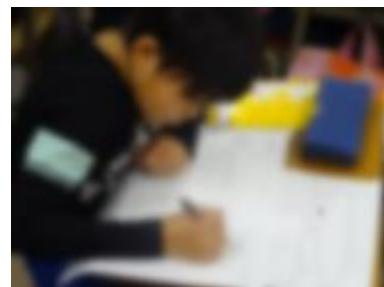
(2) 指導の構想

中越地震で被害を受けて大変な状況にもかかわらず、土田さんたちは「長岡の人を元気にしたい。」という願いをもってフェニックス花火を打ち上げた。その思いが見ていた人に届いたのかを確認するために新聞記事を活用する。子どもたちには新潟日報 2005 年 8 月 14 日の記事にあるフェニックス

花火を見た人からの感想をまとめた資料を提示し、土田さんたちの思いと関係がある記述を見つけ、土田さんたちの思いと見ている人の思いをつなげることで、「花火で元気にしたい。」といったフェニックス花火を打ち上げた意味を明確にもてるようにする。

(3) 授業の実際

本時のねらい「フェニックス花火を打ち上げるために関わった人々（土田さんたち）の思いや願いに気付く」ために、新聞記事が提示された。記事にはフェニックス花火が打ち上げられた時の観覧者の様子が記載されている。授業者は、記事に加え、記事の中の一部分を取り出したものも子どもたちに提示した。このことで、新聞に不慣れな3年生の子どもたちでも、ねらいに迫ることができた。



【ワークシートに書き込む児童】

本時では、新聞記事の他に、土田さんの話を映したビデオも資料として用いられた。そのため、じっくりと新聞を読み込む時間が少なくなり、問題解決の資料としての新聞の役割が十分に果たせなかった。新聞を活用する際には、情報過多になり情報が未消化にならないように配慮すること、記事を読む時間を十分に確保することの大切さを感じた。

授業実践 2

第5学年 道徳 「自分の役割を自覚し、行動しよう」

授業者 中山 尚人

(1) 本時のねらい

2つの役割を同時に果たさなければならず悩むケンタの姿に着目し、自分で決断して行動する時には、周りのことにも目を向けて考え、集団における自分の役割と責任を自覚する子との大切さを理解し、どのように行動することが良いか気付き具体的に判断することができる。

(2) 指導の構想

本時の導入では、あらかじめ自分たちの学校生活を想起させた上で、新聞記事を提示し、自分たちが活動する時には、周りのことを考えて行動する大切さに気付くことができるようにしていく。また、これからの学校生活を送っていく中で、仕事に対して役割を理解したり責任感をもってやり遂げたりすることの大切さも読み取ることができる記事でもある。残り3か月間を自分たちで最高学年としての見通しをもったり、責任の重みを感じながらも期待に胸を膨らませたりして生活できるようにする。



2009年10月30

日新新潟日報

(3) 授業の実際

子どもたちにとって、自分たちと同じように責任をもって委員会の仕事に取り組んでいる児童の新聞記事（投書）が提示された。この新聞記事によって自分の役割や責任感の大切さ、価値としての大切さを共通理解することができた。そのため教材が提示された際に、自分事として捉えることができ、子どもたちに大きな葛藤が生まれ問いが生まれた。子どもたちの認識のずれを際立たせるために、新聞記事は効果的であった。

授業実践 3

第 6 学年 社会科 「災害からわたしたちの生活を守る政治のはたらき」

授業者 櫻井 諒

(1) 本時のねらい

柿川放水路の工事計画が策定されてから着工するまでに 4 年間かかっていることに着目し、県が住民の生活にできるだけ影響を出さないために行った水道会社やガス会社など関係各所との調整の内容を理解し、行政の努力により自分たちの安全な生活が守られていることに気付く。

(2) 指導の構想

本時で新聞記事は 2 種類提示する。1 つ目の記事は 問いをもつために活用する。文章中の「ライフラインとの調整」という言葉に着目させ、そこに補助資料を提示することで、調整とは具体的にどのようなことをしたのかという子どもの「分からなさ」を生み出し、詳しく調べたいという思いをもたせていく。2 つ目の記事は、放水路以外の行政の取組を紹介するために活用する。市も警戒情報の提供などを行っていることに気付かせ行政が自分たちの生活の安全を守ってくれているという理解を確かにする。



【資料から県の行った調整を考える】

(3) 授業の実際

工事着工の困難さに着目させるために 1 つ目の新聞記事を提示した。注目してほしいところをあらかじめ四角で囲んでいたために子どもたちはしっかり記事を読み、その困難さを感じ取ることができた。しかし、この記事の「一刻も早く放水路を」という見出しはとてもインパクトがあり、計画策定から着工までの 4 年間に着目させ、「4 年間も何をやっていたんだ」「調べてみたい」という児童の強い思いを喚起する面でも、優れた資料であった。新聞活用において記事を十分に吟味する必要性を感じた。

6 成果と課題

(1) 成果

今年度は、研究主題に迫るために、どのような学習場面でどのように新聞を活用していくと、子どもが自ら問いをもち、共に学び合っていくことができるのか、新聞を活用した教材を開発し、単元を構想した16の授業実践を通して検証した。

実践を通して、問いをもつ場面、問いについて自分の考えや見方をつくる場面、問いを解決する場面のいずれにおいても、子どもの追求を支える上で新聞記事が有効に働くことが確認された。

また、新聞を読む際に、NIEタイム等の日常活動が、新聞に慣れ親しむ上で欠かせない活動であること、加えて当校の教育活動の基盤となる読書教育が活字と触れるときに大きな力となっていることが実践を通した子どもたちの姿から実感された。

何よりも、実践を通して多くの子どもたちが「新聞は面白い」「新聞は便利だ」「新聞を読むといろいろなことが分かる」と実感できたことが、大きな成果と言える。



【1年生の国語科の実践】

(2) 課題

「先に教材（新聞）ありき」ではなく、授業のねらいを明確にもち、そのねらいに迫るためにはどのような教材（新聞）が必要であるか、適当であるか十分に検討しなければならない。そのために、教材（新聞）選定には十分な時間が必要になる。しかしながら、授業のねらいに迫るために必要な新聞記事を見付けることが難しかった。

新聞を授業の中で活用すると、情報過多になり、1時間の中でねらいを十分に達成できなくなることが多かった。必然的に新聞記事に十分に浸る時間が少なくなり、記事のもつよさが損なわれてしまうこともしばしばであった。新聞記事を活用する際には、あらかじめ加工したり、吟味したりして指導する必要がある。